政大日本研究【第十六號】
2019 年 1 月，頁 145～167
10.30379/CJJS.201901_(16).0006

論川端文學中金錢之作用

張 月環*

中文摘要

在川端文學中，比起金錢，其作品主要是以戀情之心、命運及美舖陳其文學之根底。

然而透過金錢，改變命運，往好的一面來說，從川端文學中所表現的金錢，可視為一種潤滑劑、場面轉換、小說情節展開等的媒介作用。

本文以川端康成戰前的『掌中小説』及戰後作品，提出作者如何透過金錢、表達所隱藏的涵義。

主要內容是透過川端的金錢觀，探討其作品中的金錢，含有場面轉換、虛榮心與命運、女性生活力等的作用存在。

關鍵詞:金錢 運命 場面轉換 金錢觀 女性生活力

* 國立屏東大學應用日語學科副教授

On the Function of Money in the Literature of Kawabata Yasunari

JANE,Ywe-Hwan*

Abstract

In the literature of Kawabata Yasunari, compared with money, the works were mainly comprised of the affections, the fate, and the beauty to form the literary foundation.

However using money to change the destiny, in terms of the positive side, the money shown in the Yasunari's literature could be considered as an agent like a smoothness, a transition of scenes or an onset of the plot.

According to Kawabata Yasunari's hands novels, extremely short novels, which were prior to the war, and his works completed after the war, this thesis present how the author represent the concealed meaning through money.

Through Kawabata Yasunari's points of view to money, the thesis discussed on the literary function of money in his works, containing the transition,the vanity the fate, and the female energy.

Keywords: money, fate, transition, the opinion of money, the female energy

* Associate professor, Department of Applied Japanese, National Pingtung University.

川端文学における金銭の役割について

張　月環*

要旨

川端文学においては、金銭より恋心、運命、美などを基底として据えている。しかし、金銭を通して運命が変わり、より一層よくなる面から見れば、川端文学において金銭は一種の潤滑油、場面の転換、物語が展開されるきっかけと見ることができる。

本文は、戦前の『掌の小説』及び戦後の作品について、金銭を通して、川端が如何にその裏に隠された意味を表現したのかを取り上げようとしたものである。

主に川端の金銭観、金銭によってもたらされた場面の転換、虚栄心と運命、女の生活力についての役割を作品を通して論じたい。

キーワード：金銭　運命　場面の転換　金銭観　女の生活力

* 国立屏東大学応用日本語学科准教授

川端文学における金銭の役割について

張　月環

はじめに

川端文学における金銭についての研究は余りない。『川端康成全作品研究事典』[1]は、全小説作品 439 編、エッセイ 4 編を対象とした事典である。「モチーフ索引」においては、結婚、恋愛、死、運命などの 33 項目のモチーフが書いてあるが、金銭については一文字も含まれていない。川端本人は金銭に対して切な圧迫を身にしみて体験したことがなかったと言えるが、彼の作品においては金銭より恋心、運命、美などを基底として据えている。しかし、金銭を通して運命が変わり、より一層よくなる面から見れば、川端文学において、金銭は一種の潤滑油、場面の転換、物語が展開されるきっかけだと思われる。

作品における金銭の役割を論じる前に、川端の金銭感覚はどうなのか、まず考えるべきであろう。

川端本人の金銭に対する感覚は「何とかなるという感覚があった」と田村嘉勝は「金銭観」[2]に書いている。孤児であったが、学生時代は母の実家から毎月送金があった。羽鳥徹哉の「川端康成年譜」[3]に、川端が三歳の頃、母は父と同じ肺病で父の後を追うように亡くなった。川端は祖父母に養育され、姉は母の妹タニの婚家、大阪の秋岡家に預けられた。秋岡家当主の義一は、当時衆議院議員だったと記され、そして「母ゲンの遺した金三千百円をその義一があずかり、康成たちはその仕送りで生活した」[4]と書いてある。十六歳（満十四歳）まで祖父と一緒に暮らしたが、祖父が亡くなり、実家黒田家に引き取られた。

---

[1]羽鳥徹哉・原善編著（1998 年 6 月）『川端康成全作品研究事典』勉誠出版社
なお作品の初出はすべてこの事典からよったもの。

[2]田村嘉勝（1999 年 5 月）「金銭観」田村充正・馬場重行・原善編著『川端文学の世界　その思想 5』勉誠出版社、p 52。

[3]羽鳥徹哉（1989 年 7 月）「川端康成年譜」『新装版文芸読本 川端康成』河出書房新社、新装再版発行、p 248。

[4] 前掲注 3 に同じ、p 248。

後に、彼は「十六歳で家もなくなったが、温かい同情者や友人は身辺に絶えた日もなく」（「文学的自叙伝」[5]と自ら言った通り、幼少年時代は周囲からの愛情が注がれて、＜被恩恵者の根性＞[6]が深まっていった。

青春時代に、恋人のちよと結婚したいため、生活費を求めに菊池寛のところへ相談に行ったが、菊池寛は、「それに対し、一年間自分の家を提供し、且つ生活費として月五十円を与えることを約束した」[7]。森晴雄の『川端康成「掌の小説」論「貧者の恋人」その他』[8]に書かれている、「当時の小学校教員、公務員、銀行員の初任給を挙げると、それぞれ四十～五十五、七十五、五十～七十円である」ということから見れば、もし、川端が結婚すれば、富裕の生活とは言えないまでも、お金で困らない生活を過ごせるはずであった。菊池寛をはじめ、お金で困ったことがあれば、川端は、親戚や友人からの援助、相談できる相手がいたので、お金により生じた愛情や恨みや心の葛藤などの問題はあまりなかったことが垣間見られる。

作家としての川端は、生涯を通して発表する作品に恵まれ、生活をなんとか支えることができた。しかし、彼の妻秀子記述の『川端康成とともに』[9]で生活ぶりを伺うことができる。

昭和 3 年頃　借りてきたお金で銀座へ行って食事をして

（以下略）

昭和 5 年頃　手持ちのお金がなくなりますと、主人が徹夜で書き上げた原稿を持って私が原稿料をいただいて来る。

こうした川端の金銭観により創作された作品は、樋口一葉の「たけくらべ」に

[5]「文学的自叙伝」『川端康成全集』第 33 巻　本論では『川端康成全集』（1980 年 2 月――1984 年 5 月全 35 巻補巻　新潮社）テキストとして用いた。漢字の旧字体は新字体に改めた、p 95。

[6] https: //ja.wikipedia.org／wiki／川端康成（2016.8.24 閲覧）

[7]長谷川泉（1984 年 5 月）『川端康成論考』増補三訂版、明治書院、p 66。

[8]森晴雄（2000 年 11 月）「金銭の道」『川端康成「掌の小説」論「貧者の恋人」』龍書房、p 36。

[9]前掲注 2 に同じ、p 52。

見られる純真無垢な少女美登利が何時か遊女となり、僧侶になるため旅に出た信如少年が、それぞれ哀しい運命を歩み、そして大人の金銭の世界への入口に向かって、足を踏み入れようとする描写ではなく、また夏目漱石の「こころ」で叔父さんに財産を騙された<先生>が暗い過去を絡みながら、人間に対する信頼感さえも失ってしまうというマイナス面の物語でもない。川端が綴った金銭は、場面の転換、そして物語が展開される媒介として働くものであろう。金銭の機能を持ちながら、作品の流れの表現を要約したものとして、そこではっきりと金銭を表現していなくても、言外に読み取らせる形で表している。これについて、川端文学における金銭についての役割は少なくとも作品の「場面の転換」のパイプ、生活感情の「虚栄心」の素材（運命との係わりもある）、そして「女の生活力」の三つを担っていると考えられる。まず、「場面の転換」を論じたい。

１.場面の転換

「伊豆の踊子」（大正 15 年 1、2 月「文芸時代」）において、金銭に関する描写は何箇所かあるが、場面の転換、そして物語の展開のステップという役割を果たしている。

まず、学生の<私>が、お茶の一杯で、「五十銭銀貨を一枚置いただけ」[10]（p299）なのに、お婆さんは<私>のかばんを持って、涙がこぼれそうに口で勿体ないと言いながら、一町ばかりちょこちょこついて来るという描写がある。その場面からは、五十銭という金額の多さは関係なくて、ただ、学生が踊子を追いかけたいという熱く気持ちが強く、少しでも早く茶店のお婆さんから別れたいという状況を表わしていて、ここでは五十銭という金額に対する関心も自覚もないと言えるだろう。四人の踊子が座敷に呼ばれて、一時間ほどして四人が帰ってきて、「『これだけ･･･』と踊子は握り拳からおふくろの掌へ五十銭銀貨をざらざら落とした」（p312）という情景がある。踊子の一言と動作、五十銭銀貨のざらざらという音が聴覚に虚しく響き、リアリティーな描写においては金が足りないとの失望感を十分に感じさせることができる。しかし、これに引き続き、次の場面に変わる

[10]「伊豆の踊子」『川端康成全集』第 2 巻、以下の引用はここからよったもの。

と、「私はまた暫く『水戸黄門漫遊記』を口読した」（p312）と、今までのことは全く関係のない、何気ない自然な流れが漂っている。前の一枚置いただけと「これだけ」との五十銭銀貨との場面を比較すると、踊子の稼ぎの辛さ、学生の金銭感覚の違いが読み取られる。また学生は芸人達の話しを聞いて、明日が赤ん坊の四十九日の忌日と知り、お金を栄吉に渡す。

「これで明日の法事に花でも買つて供へて下さい。」

さう言つて僅かばかりの包金を栄吉に持たせて帰した。（p319）

旅行をしているとは言え、学生は決して裕福ではないと思う。しかし、学生は自分の旅行費用を法事の包金として栄吉に渡した。結局お金がなくなり、芸人と一緒に大島へは行かれず、次のステップ、つまり東京へ帰ることになる。この場面は極自然な切り換えであろう。最後に乗船場で土方風の男が学生に、水戸へ帰る婆さんの面倒を見てほしいと頼む。旅費を負担させられることを、至極当たり前のことだと学生は思っていた。

「伊豆の踊子」ではこのように何回も金銭によって自然に場面が転換して、そして次の流れが展開されることがよく見られる。

掌の小説の「硝子」（大正 14 年 11 月「文芸時代」）は、身分差別が書かれた小説であるが、森晴雄の「硝子」（『川端康成「掌の小説」論――「心中」その他』）[11]によると、多元文化の思想は文学には必要であり、これは川端の意思だと読み取られる。小説では「ブルジョア」の少女蓉子は硝子工場で働く少年職工の怪我を見て、入院のお金をあげ、少年がお礼に来た時には、許嫁の<彼>がまたお金を少年に渡す。十年を経て、あの時の少年が小説家になり、当時の悲惨な労働情景を「硝子」として書いた。少年が、自分自身の身分に目覚めたのは悲惨な労働生活経験であり、ブルジョアの一少女に対する恋だった。この少女の恵みによって、自分は命を救われ、そして新しい職を探す余裕を与えられた。作品の結びでは、蓉子の夫になった<彼>はそう思っていた。

しかし彼は不思議だつた。この小説の中の少女程の可憐さ

と新鮮さを妻に感じたことは昔から一度もなかつた。

[11]森晴雄（1997 年 4 月）「『川端康成「掌の小説」論――「心中」その他』」「硝子――小説の力」、龍書房、p 115。

あの腰の曲つた青い餓鬼のやうな病人に、どうしてこんな力があるのだらう。(「硝子」p 85)

少女はただの同情でお金を少年にあげた。しかし、少年にとってもらったのは金だけではなく、愛情も含め、彼の将来への道を開く原動力になった。そもそもプロレタリアとブルジョア階級はお金の問題で対立するが、川端は金銭を通じて、両方の立場に立って円滑に動いている。少年は金銭の媒介で、少女に恋心を抱いた。恋心は川端文学の核心となっている。森晴雄は、「硝子」のように一篇の小説によって、一人の人間の気持を変え、自分が気づいていないものまでも知らせてくれる小説について不思議な思い、川端は自分の筆は他人の運命までも支配する魔力を持つと信じたと解明して、「ここにもまた、『硝子』に通じるような小説の力を信じている作者の姿をみることができよう」[12]と評している。しかし「硝子」においては小説の力や愛情の力などもあるが、金銭の力は見逃せない一面であろう。この金銭によって少年の運命、そして考え方も変わった。だが、蓉子にとって、金銭は怪我の少年に対する同情の気持ちを表す手段であった。蓉子の夫は、少年を通して妻の知らない一面を垣間見たのである。つまり、川端文学にとって金銭は核心ではないが、作中での媒介として、場面と場面との転換のパイプ、それがその後の展開の流れとなり、人物と人物との潤滑油だとも言えよう。

「有難う」（大正 14 年 12 月号「文芸春秋」）も、金銭との係わりによって複雑な恋心を持った作品である。これは母と身売りされる娘と運転手との物語りである。娘を売るのはやはり貧乏でやむを得ないことであろう。作者はこれらをうまく構成して、美しく叙情性があると感じられる作品を創り上げた。貧乏、金銭のために、生活に悩むる人間が少なくない世の中であるが、川端文学は現実を世界に直視する面がある。しかし、あくまでも金銭がもたらす罪悪ではなく、返って、これがきっかけで、良い結果が結びつくとしばしば戦前の作品で描き出されている。

「有難う」と共に発表された「胡頽子盗人」は貧しい人間の生活を描いているが、その中で人情味、愛情、又純粋さが金銭によって繋がっている。炭焼きの

[12] 前掲注 11 に同じ、p 120。

娘は金がないので、その代わりに胡頽子を採り、医者にお礼に行く。小料理屋の女は熟れた女と見られるが自然の胡頽子に惹かれて、童心に戻ったようである。金銭に対する大切さ、悩みなどが淡々として示される作品だが、その中から引き出された自然、人情味をなお一層深く味わうことができる。金銭がこの作品の構成の重要な支えでありながら、重要でもなさそうに感じられ、もし作品が料理だと例えれば、金銭は隠し味だとも言えよう。

2. 虚栄心と運命

川端文学における金銭についての作品の役割には虚栄心と運命との係わりもある。まず、虚栄心についての作品を論じたい。

掌の小説には虚栄心に係る作品がいくつかある。この虚栄心は名誉欲や金銭（或いは物欲）との係りが重いと感じられる。これに関連する作品、男と女との心理及び結末を次の表で比較したい。

刊出	作品	女の心理	男の心理	作品の結末
大正 13.11 「文壇」	指環 舞台 温泉	温泉に入って、指環を見せたい少女（11、12歳）は男に身を寄せてくる。	貧しい法科大学生の彼は、少女の心を読み取り、嫌悪を感じる。	少女は、指環をよく見せるなら、 裸のまま男の膝に抱きしめられても驚かないのかもしれない。
大正 13.11 「文壇」	時計 舞台 劇場帰りのタクシーの中	女は自分の腕時計が母の形見の和製であることを恥ずかしがる。	貧しい法学士の彼は、ある弁護に関係して、女友達と金を得た。 彼は安タクシーであることを言い訳するように自己嫌悪で虚栄を張ったが、女の古い時計を見て、恋の勇気が沸いてきた。	二人の虚栄心を軽蔑してはならない。虚栄の偶然の結果は二人を結びつけることになった。
昭和 3.7 「1928」	三等待合室	女は苦労して二等の汽車に乗るように男に見せ	女の希望通り駅の三等待合室で待ち合わせにした	彼女は彼女自身を卑しめると見せ

	舞台 東京駅三等待合室	ていたが、もう厭だという手紙を書いた。	が、女はなかなか来ない。女はあいびきの常習者なのか、男を一、二等、三等に分類して、せせら笑う女なのかと思い、彼は一、二等待合室を覗きに行った。結局女は来ていなかった。翌日、女から手紙をもらった。 彼女が三等に乗る女だと信じられない。	かけて、実は彼を嘲っているのかもしれなかった。
昭和3.10.23~10.27「時事新報」	時雨の駅 舞台 大森駅	彼女は傘を持って駅で夫を待つ。見つけた恋敵への虚栄心から、隣りの小説家の根並氏夫人を装い、女傘を根並氏に渡した。一方、恋敵も負けず、彼女等を恋していた大学生が、今は生活にやつれた安月給取りの夫になったのを恋敵に見られたくなかった。人気	小説家の彼は踊子の妻が帰らぬ家の二階から、時雨の真夜中まで暗い隣りの家をいぶかしげに眺めながら、世の夫への忠告の言葉を思い浮かべてきた。	夫等よ、秋の時雨の宵には、妻の待つ駅へと早々帰りなさい。女心も女傘のように、仇し男の手に渡らぬとは保証できないとの忠告は文の締め括りである。

		俳優中野の恋人になりすまし、中野と一緒に帰ってゆく。		
昭和 7.5「新潮」	舞踊会の夜	貧しいタイピストの彼女は彼に連れられ、舞踊会を見に行ったが上流階級の派手な姿、舞台の華やかな衣裳を見て批判した。劇場に来ている婦人達の着物は、彼女が買いたいと思う百貨店の特売とは目方が違う。	文芸部記者の彼は、舞踊会で弟の昔の恋人を発見。弟の恋人であった彼女は弟を捨て、舞踊界で出世している。弟は昔の恋人のため、大学中退、今は、素人劇団で妻と貧しい生活を暮らしている。劇場を出て、途中で弟と出会った。今子供が生まれたと弟は言ったが、もう親になったから、しっかりしなくてはと弟は兄の励ましの言葉を受け、頷いた。	タイピストの彼女の見る目で、舞踊を通して、生まれれながらに貧富の差があることを実感する。だが、親になって、心の入れ替え貧乏を脱出するも可能である。
	舞台 劇場、銀座路上			

以上の例のように、金銭との係わりがある作品では虚栄心がよく表れる。「時計」と「指環」のストーリーは単純で、この虚栄心を読み取れるが、「時雨の駅」においては、女達の人妻の愛と虚栄心と家庭の守りの苦しみとの複雑な心理を絡めて描かれた作品である。この技法は前述より一層成熟するように見られたが、

金銭のため、生活が苦しむほどより女心の複雑な愛情心理を引き出すことが目的だと感じられる。だが、この女心の複雑な愛情心理には虚栄心も絡んでいると思われる。「舞踊会の夜」には生来貧富の差があるが、人がしっかり前向きになったら金銭も回ってきて、生活に困らないほど生きていけるとの作者の意図が含まれるだろう。作中では男に対する心理描写はあまり細かく書かれていないが、逆に、女に対する心理描写は生活の苦しさ、感情の行方よりも虚栄心の方に重きを置いていると感じられる。

川端文学には、金銭との繋がりによって虚栄心や運命、或いは金銭と虚栄心と運命との互いに関連があるというイメージを作品から受け取れる。では、川端文学における運命について論じたい。

「貧者の恋人」（昭和 2 年 5 月 5 日「東京朝日新聞」）では、女の人は「私の男の方を見る眼は運命の神さまのやうに間違ひがないのですもの。当然出世なすつてよ。」[13]と言っている。彼女の言う通り、付き合った男は皆出世して、そして彼女と別れる。こうした繰り返しをしながら、彼女は生きている。最後は彼女は男を見る感覚を失い、彼女も終わった。彼女は貧者の恋人の役目を果たし、男たちに恨みも持っていない、これは自分の運命だと悟った。彼女が亡くなり、付き合った男達は彼女に感謝し、墓は彼女が生前に好きなレモンが山のように供えてある。このような金銭と運命との係りを描いた人生の物語は作者によっていつも淡々として描写される。だが、戦後、五十歳の時に書いた作品「みづうみ」（昭和 29 年 1 月～12 月「新潮」）を含み、それ以後の作品には異色なスタイルも表われ、戦前と戦後の作品では金銭と運命と係わり合いが違ってきた。

「みづうみ」の主人公の銀平は、宮子の後をつけ、彼女からハンドバックを顔に投げつけられたが、その中には現金二十万円が入っていた。二十万円は、宮子にとって運命を狂わすほどの大金であり、有田老人の愛人として内緒で貯めた金であった。しかし、彼女はハンドバックで男に一撃を与えた瞬間、老人の蔭に埋もれた青春が一瞬にして甦り、また復讐したような戦慄でもあったと描写される。二十万円の大金を一瞬で失なっても惜しみなく、返って、長い月日の劣等感がその一瞬に補償されたものだと宮子はそう考えた。銀平にとって彼女は自

[13]「貧者の恋人」『川端康成全集』第 1 巻、p 262。

分と同じ「魔界」[14]の族だと思った。金銭のために宮子は魔性の女になったが、銀平の教え子の久子も、銀平のために親から金を盗んだ。川端文学にとって、魔性の女になったのは運命の必然性だと示される。

六十二歳で書いた「古都」（昭和 36 年 10 月 8 日～37 年 1 月 23 日「朝日新聞」）は京都の年中行事を織り込んで、双子がそれぞれ違う人生を歩んでゆく物語である。一人は実家の杉山で山の仕事をする苗子であり、一人は捨子で織物問屋のお嬢様として育てられた千重子である。何故千重子を捨てたのかは作品では説明されていないが、ただ千重子の想像によると、「実の父は、そのふた子の片割れの千重子を捨子したことを、杉の木末で思ひふけつてゐて、不覚にも、落ちたのではないか。さうにちがひない。」[15]と父の不憫を思っている。そして、作品には父が北山杉の作業をして、木から木へ渡り損なって落ちたことが書かれているが、そのようなわけで、生活が余り良くなかったと思われ、そのために千重子を捨てたと考えられる。

つまり、金銭の問題で千重子を捨てた可能性が強く感じられる。しかし、ここでは金銭を強調していない。返って、運命の話がよく出てくる。

もう一つの捨子の理由は昔、日本やヨーロッパでも「双子」[16]や三つ子が産まれた時は不吉なものと考えられたり、忌み嫌われていたこともあり、双子の片方を養子や養女に出す、あるいは捨てるということもあったかもしれない。誰かに捨てられるというのはこれも運命なのであろうか。

捨子には捨子の運命がある。これは両親の善悪の問題ではなく、人間はそれぞれの運命を歩んでゆくので、自分は覚悟しなければならない。千重子と養母との話によると、

「運命・・・。それから千重子は、うちの子になつてしもて、二十年もたつたやないか？千重子によかつたか、悪かつたか。よかつたとしても、胸のうちに手を合して、かんにんしてやと、いつもあやまつてる。お父さんもさうどつ

[14]「みづうみ」『川端康成全集』第 18 巻、p 59。

[15]「古都」『川端康成全集』第 18 巻、p 324。

[16]https://kosodatech.blog133.fc2.com／blog-entry-2178.html(2016 年 8 月 28 日閲覧)

しやろ。」

「よかつた、お母さん、よかつたと、うちは思うてます。」

と、千重子は両の手のひらを目にあてた。（「古都」p 269）

とあるように、捨子の人生も悪くないと書かれている。人にはそれぞれ変えられない過去があり、この過去がもし罪を背負ったものであるにおいては、金銭がその罪の引き金として多く使われる。川端文学の場合には、罪よりも人のまぬがれぬ悲しい過去が運命として描がれる。苗子も言うように「人の運命て、わからんもんどすな。」（「古都」p 431）そして、姉との出会いについては「涙の出る運命ではあつたらう」（ p 339）と描いてある。次の節に論じる「舞姫」でもバレリーナの教師波子が言った「木にもそれぞれの運命があるのかしら」[17]との言葉が書かれている。

金銭と運命が絡んだかたちで作品中に表現されるのは戦後の川端文学においてはしばしば見られることである。彼が織り込んでいる虚と実の世界では、金銭が具体的に見えるもので、運命が虚無で見えないものだ。見えるものから見えないものを引き出すものとして、金銭よりこのような効果的な役割を果たすものはほかならない。

3. 女の生活力

「金銭の道」（大正 15 年 8 月「苦楽」）について、川端は「独影自命」で関東大震災の翌年、大正 13 年 9 月 1 日に、本所被服廠跡へ震災記念日に取材に行って思いついた。その日の写生も入っていると述べ、また、「乞食婆さんに女の生活力を見ようとして、『夏の靴』、『馬美人』なども通じるものがある。」[18]と記している。作品では乞食の婆さんを女主人公として関東大震災を背景に登場させ、彼女は同じく乞食のケンと同居して、大胆な行動をして、その生き方が描写される。

ケンは婆さんの家族が一人残らず震災で焼け死んでしまったことを知り、婆さんを世話した。彼は婆さんと被服廠跡へ一周忌のお参りに行く。ケンは左足の

[17]「舞姫」『川端康成全集』第 10 巻、p 266。

[18]「独影自命」『川端康成全集』第 33 巻、p 470。

兵隊靴を脱いで婆さんに履かせ、自分も片方の靴を履く。二人は参詣の人々が投げる賽銭を拾って、片方の靴に入れた。群集が投げた金銭、それが雹のようにばらばらと頭へ降った。金銭の冷たい道が納骨堂へ近づくほど厚くなり、人々はもう土の一寸も上を歩いていた。婆さんはケンよりたくさん拾って、上機嫌になり、娘に櫛を供えてやることさえも忘れ、今夜ケンのお嫁入りと言った。二人の会話を交わす場面を見てみよう。

「五十銭、六十銭、八十銭、九十銭、一円四十銭、――
二十一円三十銭、まだまだある。」
「ねえ、ケンさん。わたしや、娘に櫛を供へてやるのを
忘れたよ。懐に入れたまんまさ。」
「娘も浮ばれめえ」
「川へ流してやるよ。この靴に入れて流してやるよ。」
　婆さんは娘のやうに大きく胸を振つて、靴を大川へ投げた。
「銭勘定なんか明日でいいよ、ケンさん。酒を買はうよ。
鯛を買はうよ。今夜はわたしの――お嫁入りだよ。いい
かい、ケンさん。何をぼんやりしてんのよ。厭な人。」
　婆さんの眼は奇怪に若々しい色で濡れて来た[19]。
（「金銭の道」p168-169）

震災の一周忌で、本来悲しい遭遇に遭い、精神的に傷が深いはずだが、この「金銭の道」で、たくさん金銭を拾った婆さんが娘への供えさえも忘れ、お嫁入りという態度は不思議だと思われる。金銭の道を歩いた後、婆さんの心も体も高まって興奮気味になる、金銭の力は十分発揮されていると考えられる。

当時の情況を見れば、川端の『感情装飾』（全 204 ページ。大正 15 年 6 月金星堂）の定価は一円二十銭、送料八銭であり、それと比べると、乞食の婆さんが拾った金はかなり多い。女の生活力を見ようという作者の視点から見ると、金銭によって婆さんの心理も若い女のように変り、心を昂ぶらせることもできる。「金銭の道」における女の生活力は金銭次第だとも言えよう。

[19]「金銭の道」『川端康成全集』第 1 巻。

また、別の面から見れば、震災で家族を失った婆さんはケンを頼りつつ生きてきたが、賢いと言われていたケンは、金銭を拾うのが婆さんより下手だった。ケンの言う通り、「女つて奴は、いざとなると太え度胸だな。」[20]と思う。女には普段は見えない力がいざとなると出てきて、生活の力を甦らせて、男にも負けないくらい、いや、それ以上の度胸を見せるという女としての生活を発揮することを、「金銭の道」で表している。

「馬美人」（昭和 2 年 5 月「文芸春秋」）も前述のように書かれたものである。作者によると、このような小説は「家庭からの解放を書いた」、「『馬美人』その他、（略）やはり悲哀と自由との象徴として歌つたのであらう」と（「独影自命」p 471）述べている。

母親は村人に「うちの娘には婿が何人もあるのに、娘の嫁は私一人だからどうにもやりきれないよ」[21]と言い、馬美人と母との生活の苦しさが分かる。しかし、この貧しい生活で馬美人は勤勉で働く姿を見せる一方、妾と別れた父親のところへ行く母親に対して不満を抱き、その母親と別れ、裸馬に跨がり、山へ去ってゆく。自分のプライドを持つ、女の生活力、そして自立の勇ましさはこれであると示している。

長篇小説「舞姫」（昭和 25 年 12 月 12 日～26 年 3 月 31 日「朝日新聞」）は、女主人公の波子が、女の生活力を見せるスタイルの作品である。彼女はバレエ教室を開き、一家の生活費は彼女が背負っている。夫の国学者の矢木との間には二人の子供がいる。娘の品子はバレリーナを目指し、息子の高男は大学生である。一家は幸せそうに見えるが、波子は旧知の竹原とプラトニックの関係を持ち、一方、矢木は妻に内緒で貯金をし、波子の家さえも密かに自分の名義に書き換えてしまう。品子の友人の友子は波子の教室の助手であるが、愛人のため、もっと金銭が欲しくて助手をやめ、ストリップをした。朝鮮戦争が始まり、戦争恐怖症の矢木と高男は海外脱出の話が出て、波子は離婚を決意し、品子も思いを寄せていた香山の元へ旅立つ。

矢木家は金銭が足りないとは思えない。しかし、夫婦関係には金銭との係わ

[20] 前掲注 19 に同じ、p 168。

[21]「馬美人」『川端康成全集』第 1 巻、p 183。

りがある。金銭を通して、夫のやり方は不正と見られ、波子の不倫の行為には同情できる。ここでは金銭問題より愛の行方の方が注目される。しかし、金銭から取り上げる問題点は次にある。一、何故、波子は一家の生活費を負担しなければならないのか。二、矢木はなぜ妻に内緒で貯金するのか。彼の性格が陰湿なのか。三、友子は愛人のためにお金がほしくて、自分を犠牲にして稼ぐ。金銭イコール愛情なのか。

友子は妻子ある男を愛し、そして、この男の子供の医療費のため、自分が献身的にストリップに出る。彼女は愛を単純に考え、報われない愛を知っても、「飛んで火に入る夏の虫」のような行動を取る。

高根沢紀子は「『舞姫』から見た女性像」[22]で書いたように、「波子も品子もそれぞれの恋愛を<罪>として考えていて、友子がその<罪>を前向きに捕られているところも対照的である。」もし恋愛からもたらす罪があれば、そこでの金銭の役割はもっと罪の重さをはっきり分かるように果たしているのであろうか。高根沢紀子はまた次に「友子は一見『雪国』の駒子と同じ系譜にあると考えられるが、自らの犠牲を自由だとする考えは駒子とは一線を画している」[23]と述べている。川端文学における女性像の犠牲、或いは献身という行動は愛の純粋さに係わることが多く見られる。生活力のある女にとっては、金銭の動くことが愛の純粋さを一層際立たせる役割を担っている。

「舞姫」が注目されるのは<舞姫>だけではなく、作中に出てくる<魔界>という語が戦後川端文学を論じるキーワードとしては最初に表れたものであるからである。作品には品子は父親矢木の部屋に入って、床に掛かっている一休和尚が書いた「仏界、入り易く、魔界、入り難し」[24]の一行物を見たという描写がある。矢木の解釈によると、一休の言葉は、センチメンタリズムを退けたという意味に取れ、女は精神で舞はない、肉体で舞うだけで、お母さんの踊りは、お母さんのセンチメンタリズムに過ぎなかったと言い、品子の踊りについても、青春の幻の絵そらごとだと述べている。そして「魔界には、感傷がないのなら、ぼくは魔界をえら

[22]高根沢紀子（2000 年 6 月）「『舞姫』から見た女性像」川端文学研究会編『川端文学への視界』教育出版センター年報 NO.15、p 94。

[23]前掲注 22 に同じ、p 95。

[24]「舞姫」『川端康成全集』第 10 巻、p468。

ぶね。」[25]と矢木は言っているので、彼が魔界に入ろうとする勇気はまだ足りないと見られる。「みづうみ」ではすでに魔の行動に入った人物を主人公としているのに対して、「舞姫」における波子は不倫の相手として、魔に入ろうとする、踏み出す寸前の人物を主人公としていると思われる[26]。

「舞姫」では二人の夫婦関係に金銭問題が介入し、「みづうみ」の場合では、宮子と老人の愛人関係に金銭の係わりがある。川端文学の、金銭を意識的に<魔界>との係わりがあるとのテクニックは恐らく戦後の作品から読み取ることができるであろう。

おわりに

川端の伊豆の旅費は、父の遺言で五十円をもらい、「その金で伊豆の旅に出た。そして旅芸人の踊子に恋をした。」[27]と彼が書いた「処女作の祟り」（昭和 2 年 5 月「文芸春秋」）で説明した。十四歳まで祖父と一緒に暮らして、毎月親戚から二十三円二十五銭を仕送りしてもらって生活している（『川端康成・隠された真実』[28]）。しかし、少年の川端は欲しい本を借金で買うという癖があり、ついに四十円六十何銭の借金でもあったと大正三年二月二十四日の日記には書いている（『作家川端の展開』[29]）。この借金を羽鳥徹哉は調べ、大正五年に家は伯父から売られたが、「その秋、康成が祖父と暮らした宿久庄の家が売られたが、（略）その金で本屋の借金も払ったものらしい」[30](p11)と『作家川端の展開』で述べている。

生活費が毎月送金されてきた少年の川端は、金で困ったことがあっても、何とかなるという感覚がおそらくこのような環境で育ってきて、培った性格だと思われ

[25]前掲注 24 に同じ、p470。

[26]拙著（2001 年 11 月）「『純粋の肉体』の裏側」『川端康成の美の性格』、サン・エンタープライズ、p 140-141 には詳しい説明がある。

[27]「処女作の祟り」『川端康成全集』第 1 巻、p 188。

[28]三枝康高（1980 年 6 月）『川端康成・隠された真実』、新有堂、p 86-91。

[29]羽鳥徹哉（1993 年 3 月）『作家川端の展開』、教育出版センター、p 10。

[30]前掲注 29 に同じ。「この十六歳の春までの本代を、十八歳の秋私の家を売って伯父に払ってもらったのである。」と全集第 33 巻「獨影自命」に書いてある（p 281）。

る。また新感覚派の旗手としての川端は金銭の感覚より個人の発想、叙情性を如何に作品を通じて十分表現し、発揮するかに全力を傾けた。金銭に対して、お金は天下の回り物だから、川端が言った「金はあるヤツが出せばよい。なければ払うな」[31]という彼の金銭哲学を理解できるだろう。また、「川端は借金の天才だ」[32]と言われたが、しかし、「ないものはない。しかしいずれ払います」と言った彼は、決して金銭感覚のルーズないい加減な人間ではなく、筋を通す人だ[33]という評判があった。従って、彼の作品では夏目漱石の「心」のように金銭に対する鋭い批判がなかった。

川端文学は漱石文学のように金銭は「全面的にたよると、人間関係を取り結ぶ情愛は消えてしまうという矛盾を抱く」と『漱石文学における金銭感覚』[34]においての矛盾な観点を取るのではなく、場面の転換や小説の展開など媒介として扱う。金銭の「力」は川端文学において余り存在感を感じていないように見えたが、魔界に入ってからこそ、この力が意識的に表れたと感じられる。

以上論じたように、川端文学においては金銭で引き起こすクライマックスの節は余り見られないが、金銭を通じて、作品の場面との転換、小説展開の流れ、虚栄心と運命、女の生活力、また運命を引き出すきっかけ、媒介としての役割を果たす機能は理解できると考えられる。

付記：本論は 2017 年 5 月 19 日に国立高雄餐旅大学が主催、「2017 年応用外国語国際学術シンポジウム」で発表をもととして、また修正、加筆したものである。本論を書くに当り、友人鈴木幸枝様からのご指導、日本語を直して頂き、厚く御礼申し上げたい。

[31]http://www.maesaka-toshiyuki.com/person/3709.html（2018.10.19 閲覧）。

[32]前掲注 31 に同じ。前坂俊之「日本風狂人伝④ノーベル賞作家・川端康成は借金の天才だよ」。

[33]つぶやき館「川端康成の金銭感覚に秘められた偉大な才能」における「北条誠氏の話である」（https://madonna-elegance.at.webry.info/201512/article_8.html）（2018.10.19 閲覧)。

[34]林寄雯(2013 年 3 月)『漱石文学における金銭感覚』赤羽学の「序」、致良出版社、p6。

参考文献

川端康成（1980.2―1984.5）本論では『川端康成全集』全35巻補巻テキストとして用いた。漢字の旧字体は新字体に改めた。東京：新潮社

三枝康高（1980.6）『川端康成・隠された真実』、東京：新有堂

高根沢紀子「『舞姫』から見た女性像」（2000.6）川端文学研究会編『川端文学への視界』年報NO.15、東京：教育出版センター

田村嘉勝・田村充正・馬場重行・原善編著（1999.5）『川端文学の世界 その思想5』「金銭観」、東京：勉誠出版社

長谷川泉（1984.5）『川端康成論考』増補三訂版、東京：明治書院

羽鳥徹哉・原善編著（1998.6）『川端康成全作品研究事典』、東京：勉誠出版社

羽鳥徹哉（1989.7）「川端康成年譜」『新装版文芸読本　川端康成』、東京：河出書房新社　新装再版発行

羽鳥徹哉（1993.3）『作家川端の展開』、東京：教育出版センター

森晴雄（1997.4）「『川端康成「掌の小説」論――「心中」その他』」「硝子――小説の力」、東京：龍書房

森晴雄（2000.11）「金銭の道」『川端康成「掌の小説」論「貧者の恋人」』、東京：龍書房

林寄雯(2013.3)『漱石文学における金銭感覚』、台北：致良出版社

WEB資料

https: //ja.wikipedia.org／wiki／川端康成（2016.8.24閲覧）

https: //kosodatech.blog133.fc2.com／blog-entry-2178.html(2016.8.28閲覧)

http://」www.maesaka-toshiyuki.com/person/3709.html
前坂俊之「日本風狂人伝④ノーベル賞作家・川端康成は借

金の天才だよ」（2018.10.19 閲覧）
https://madonna-elegance.at.webry.info/201512/article_8. html つぶやき館「川端康成の金銭感覚に秘められた偉大な才能」における「北条誠氏の話である」(2018.10.19 閲覧)